

## 第14章 高等学校等進学者の卒業等の状況と他項目との関連

### 1 中学校卒業後の支援に対するニーズとの関連

■【(問17) 中学校卒業後の支援のニーズ】と【(問18) 中学校卒業時の進路状況】で「1. 就職せずに高等学校等に進学した」を選んだ者とのクロス集計

(上段…観測度数、下段…標準化残差)

※設問及び選択肢については、P. 33 を参照する。

問17	1. 就職せずに高等学校等に進学した (問18a)			
	1. 高校卒業	2. 高校在学中	3. 高校中退	P値
1. 進学	209	23	39	
	0.0	0.7	-0.5	0.72
2. 仕事	245	33	64	
	-2.8	1.7	<u>2.0</u>	<u>0.02</u>
3. 勉強	189	25	36	
	-0.6	1.7	-0.5	0.25
4. 技能	300	39	74	
	-2.6	1.8	1.7	0.03
5. 表現	277	33	57	
	-0.9	1.3	0.1	0.44
6. 居場所	239	28	56	
	-1.5	0.9	1.1	0.3
7. 悩み	285	28	58	
	-0.2	0.0	0.2	0.99
8. 生活	86	10	21	
	-1.0	0.4	0.8	0.62
9. その他	23	3	6	
	-0.7	0.4	0.5	0.78
10. なし	345	21	69	
	1.4	-2.6	0.4	0.03

【(問18) 中学校卒業時の進路状況】で「1. 就職せずに高等学校等に進学した」と回答したの1,298人について、高校卒業、高校在学中、高校中退の状況と【(問17) 中学校卒業後の支援のニーズ】との関連については、高校を中退した者は、中学校卒業後の支援のニーズとして「2. 仕事」の傾向が有意に高い。

### 2 中学校卒業後の施設の利用状況・相談した人との関連

■【(問16) 中学校卒業から現在までに利用した施設・相談した人】と【(問18) 中学校卒業時の進路状況】で「1. 就職せずに高等学校等に進学した」を選んだ者の高等学校等卒業時の状況とのクロス集計 (上段…観測度数、下段…標準化残差)

※設問及び選択肢については、P. 30 を参照する。

問 16	1. 就職せずに高等学校等に進学した (問 18a)			
	1. 高校卒業	2. 高校在学中	3. 高校中退	P 値
1. 適指	51	7	7	
	0.3	1.0	-1.1	0.39
2. 相談	18	2	5	
	-0.6	0.1	0.7	0.79
3. 児相	20	4	6	
	-1.4	1.2	0.7	0.34
4. 職安	120	17	41	
	-3.3	1.0	<u>3.1</u>	<u>0.003</u>
5. 保健	8	1	13	
	-4.6	-0.6	<u>5.7</u>	<u>0.0</u>
6. 病院	280	40	61	
	-2.0	<u>2.5</u>	0.4	0.03
7. FS	31	3	12	
	-1.6	-0.3	<u>2.1</u>	0.12
8. 林 <sup>o</sup> ス <sup>o</sup>	16	1	9	
	-1.9	-0.7	<u>2.8</u>	0.02
9. 民間	64	11	11	
	-0.6	1.9	-0.7	0.16
10. 養教	100	7	14	
	1.5	-0.8	-1.2	0.3
11. 教師	269	21	25	
	<u>4.1</u>	-0.7	-4.2	<u>0.0</u>
12. SC	107	9	19	
	0.7	-0.4	-0.4	0.8
13. その他	71	3	12	
	1.3	-1.5	-0.4	0.28
14. なし	380	36	75	
	0.2	-0.3	-0.1	0.94

【（問 18）中学校を卒業してすぐの時点（4 月）での進路状況】で「1. 就職せずに高等学校等に進学した」と回答した 1,298 人について、高校卒業、高校在学中、高校中退の状況と【（問 16）中学校卒業から現在までに利用した施設・相談した人】との関連については、高校卒業者においては「11. 教師」、高校在学中においては「6. 病院」との関連に有意な差が生じている。

高校中退者においては、特に「5. 保健」「4. 職安」「8. 塾・ｽﾃｯｼﾞ」「7. FS」との関連で有意な差が生じている。（ただし、「5. 保健所」、は有意差を示しているものの、回答数が少ないことに留意が必要である。）

高校を卒業した者では、教師との関係の深さがうかがえる。中退者について、就労志向から職業安定所へという方向性も明確である。

## 第 15 章 現在の就業・就学状況

### 1 現在の就業・就学状況（問 24、問 25）

【問 24】と【問 25】では、現時点での回答者の「就業」と「就学」状況を聞いている。以下は、その単純集計結果である。

ただし、ここでは、【問 2】4 の選択肢「2. 家業を手伝っている」と「4. 自分で会社などを経営している」を統合して「2. 家業手伝い、会社経営」とリコードし（変数【問 24N】）、【問 25】の選択肢「1. 全日制高校」「2. 定時制高校」「3. 通信制高校」「6. 特別支援学校高等部・高等特別支援学校」を統合して「1. 高校」へとリコードし、更に「4. 高等専門学校」と「7. 短期大学」と「8. 大学」を統合して「3. 高専、短大、大学」へとリコードした（変数【問 25N】）。

問 24N	度数	比率 1	比率 2
1. 正社員として会社などに勤めている	149	9.3%	9.6%
2. 家業手伝い、会社経営	55	3.4%	3.5%
3. パート、アルバイトとして会社などに勤めている	517	32.2%	33.1%
4. その他	136	8.5%	8.7%
5. 特に仕事にはついていない	703	43.8%	45.1%
有効回答	1560	97.3%	100.0%
<NA>	44	2.7%	
総数	1604	100.0%	

問 25N	度数	比率 1	比率 2
1. 高校	145	9.0%	9.3%
2. 専門学校・各種学校等	239	14.9%	15.3%
3. 高専・短大・大学	365	22.8%	23.4%
4. 上記学校には通っていない	809	50.4%	51.9%
有効回答	1558	97.1%	100.0%
<NA>	46	2.9%	
総数	1604	100.0%	

【問 24N】の比率 2 から、現時点では、回答者の 54.9%が何らかの仕事についており、また、【問 25N】の比率 2 から、その 48.1%が何らかの学校に通っていることが分かる。

ここで、仕事の内容と学校の種類を無視して、「就業の有無」と「就学の有無」を示す新たな変数を作成して、そのクロス集計表を分析すると、回答者の 81.9%（有効回答者数 1,524 人中の 1,248 人）は、就業あるいは就学していることが分かる。具体的には、「就業者」が 526 人（34.5%）と最も多く、次に「就学者」が 424 人（27.8%）、「就業・就学者」が 298 人（19.6%）、「非就業・非就学者」が 276 人（18.1%）である。

	1. 学校に通っている	2. 学校には通っていない	3. 合計
1. 働いている	298 19.6%	526 34.5%	824 54.1%
2. 働いていない	424 27.8%	276 18.1%	700 45.9%
合計	722 47.4%	802 52.6%	1,524 100.0%

	1. 正社員として会社などに勤めている	2. 家業手伝い、会社経営	3. パート、アルバイトとして会社などに勤めている	4. とくに仕事にはついていない	5. その他	合計
非就業・非就学者	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	274 100.0%	274 18.0%
就学者	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	421 100.0%	421 27.7%
就業者	125 23.8%	35 6.7%	<u>289</u> <u>54.9%</u>	77 14.6%	0 0.0%	526 34.6%
就業・就学者	9 3.0%	19 6.4%	215 72.2%	55 18.5%	0 0.0%	298 19.6%
合計	134 (8.8%)	54 (3.6%)	504 (33.2%)	132 (8.7%)	695 (45.8%)	1,519

次に、その就学と就業の状況について分析する。【問 24N】と【問 25N】をクロス集計した結果、有効回答は 1,519 人となった。就業状況については、非正規就業（「3. パート、アルバイトとして会社などに勤めている」）の比率が高く、有効回答数のうち 33.2%（正社員は 8.8%）であった。

なお、2010 年国勢調査によれば、対象となる年齢は異なるが、20～24 歳の年齢層全体における「パート・アルバイト・その他」就業者の比率は 24.0%（正規職員の比率は 39.2%）となっている。

【問 25N】の「現在、どこか学校に通っていますか」という質問に対して、「就業・就学者」と「就学者」は 749 人（全体の 48.1%）のうち、「高専、短大、大学」に就学している者が 365 人（回答者全体の 23.4%）、となっている。学校基本調査によれば、2010 年の「大学・短大・高専」への進学率は 57.7%であり、また 2010 年の国勢調査では、20 歳人口のうち、「大学・大学院・短大・高専」に在学している者は 58.8%と報告されている。これらの全国平均と比べると、今回調査における回答者の「高専、短大、大学」への就学率は低い。

次に「非就業・非就学者」について、現時点での「非就業・非就学者」は 276 人（18.1%）である。2010 年の国勢調査の結果によれば、20 歳人口のうち「失業者」5.2%、「非労働力人口（家事）」2.2%、「非労働力人口（その他）」1.2%を合わせた比率は 8.6%（労働力状態「不詳」を合わせると 12.3%）であり、これと比べるとその比率は高い。

## 2 現在の就業・就学状況と成長したところ

回答者が中学卒業以降で自分がどのような点で「成長した」と認識しているのかということと、回答者の現在の「就業・就学」状況がどのように関連しているのかということについて分析した。

次の表は、【（問 27）中学校卒業時と比べて成長したところ】への回答と現在の就業・就学状況を示す変数とのクロス集計表を要約して示したものである。

この表は、クロス集計から得られる標準化残差の値を示しており、その値の絶対値が 1.96（おおむね 2）以上であれば、両者の間に統計的に有意な（正若しくは負）関連があるということを意味している（なお下の表では正の有意な残差を斜体下線で示す）。

■問 27 への回答と現在の就業・就学状況を示す変数とのクロス集計表（標準化残差）

問 27	現在の「就業・就学状況」（問 24、問 25）				
	非就業・ 非就学者	就学者	就業者	就業者・ 就学者	合計
1. 身のまわりのことが自分でできること	-2.6	-2.2	<u>3.4</u>	0.9	0.0
2. 身体が健康になったこと	-5.0	1.5	-0.3	<u>3.5</u>	0.0
3. 生活のリズムがつかれること	-7.6	0.0	<u>5.0</u>	1.4	0.0
4. 自分で働いて収入を得ようとする こと	-12.7	-15.5	<u>18.4</u>	<u>7.8</u>	0.0
5. 人とうまくつきあえること	-9.5	1.5	<u>3.8</u>	<u>3.1</u>	0.0
6. 人の痛みがわかるようになったり、 人に対して優しくなったこと	-3.5	-2.0	<u>2.3</u>	<u>3.0</u>	0.0
7. 自分に自信が持てること	-9.1	1.8	<u>2.7</u>	<u>3.5</u>	0.0
8. 家族との関係が改善されたこと	-3.4	-1.4	<u>3.4</u>	0.8	0.0
9. 将来の希望が持てること	-8.0	<u>4.6</u>	-1.7	<u>4.6</u>	0.0
10. かつしたり、いらいらしたりし なくなったこと	-1.6	-1.8	<u>2.3</u>	0.9	0.0
11. いつまでもくよくよ悩まなくなっ たこと	-3.8	-0.7	<u>2.5</u>	1.5	0.0
12. 自分の気持ちをはっきり表現でき ること	-5.7	0.8	<u>3.1</u>	1.0	0.0
13. 孤独に耐えられること	-3.2	-0.7	1.5	<u>2.1</u>	0.0
14. 学力が身に付いていること	-6.3	<u>10.1</u>	-8.9	<u>5.3</u>	0.0
15. その他	-0.2	-1.5	0.6	1.2	0.4
16. 成長したとは思えない	<u>9.4</u>	-1.4	-3.9	-2.9	0.0

上記の表には両者に明確な関連があることが示されている。全体的に見ると、現在の就業・就学状況について「就業者」、若しくは「就業・就学者」において、多くの「成長したところ」の選択率が有意に高くなっている。

具体的に有意な差が生じている項目を高い比率から5項目あげると、

「就業者・就学者」においては、「4. 自分で働いて収入を得ようとする事」「14. 学力が身に付いていること」「9. 将来の希望が持てること」「2. 身体が健康になったこと」「7. 自分に自信が持てること」

「就業者」においては、「4. 自分で働いて収入を得ようとする事」「3. 生活のリズムがつかれること」「5. 人とうまくつきあえること」「8. 家族との関係が改善されたこと」「1. 身のまわりのことが自分でできること」

「就学者」においては、「14. 学力が身に付いていること」「9. 将来の希望が持てること」であった。

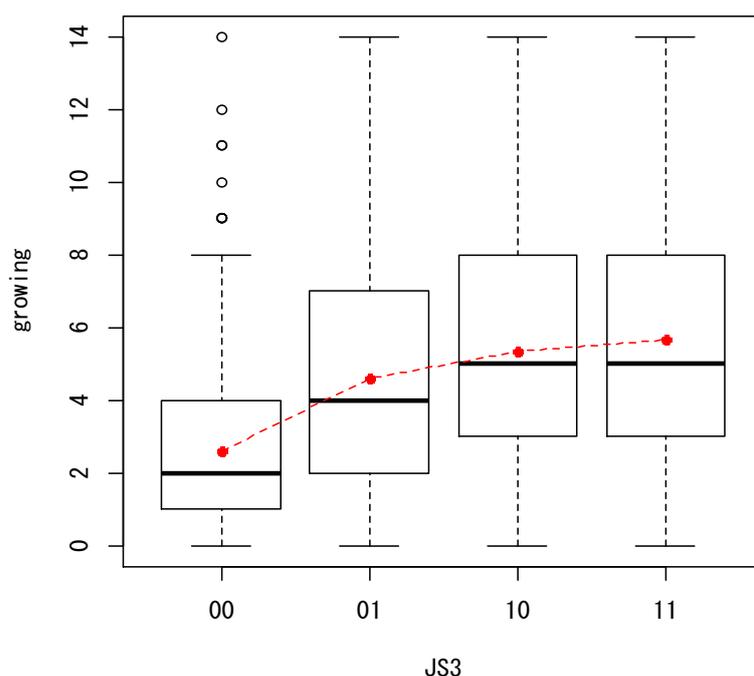
以上のように、回答者の現在の「就業・就学」状況と成長の認識との間には密接な関連があることが明らかになった。

次に、回答者の現在の「就業・就学」状況と成長スコア (growing score) (付録：参考3) の関連をみることにする。次の boxplot 図は、回答者の現在の就業・就学の4類型（「00：非就業・非就学者」「01：就学者」「10：就業者」「11：就業・就学者」）別に、それぞれの成長スコア (growing score) の分布を示したものである（なお図中の点はそれぞれの類型のスコアの平均値を示している）。

このグラフから、「00：非就業・非就学者」「01：就学者」「10：就業者」「11：就業・就学者」の順に成長スコア (growing score) の平均値が上昇していることが分かる。それぞれのグループのスコアの平均値は「00：非就業・非就学者」が2.60、「01：就学者」が4.61、「10：就業者」が5.35、「11：就業・就学者」が5.68である（ただし「10：就業者」と「11：就業・就学者」との間には統計的に有意な差はない）。

すなわち、「10：就業者」「11：就業・就学者」は、「00：非就業・非就学者」「01：就学者」に比べて「成長したところ」を感じる度合いが大きいことを示している。

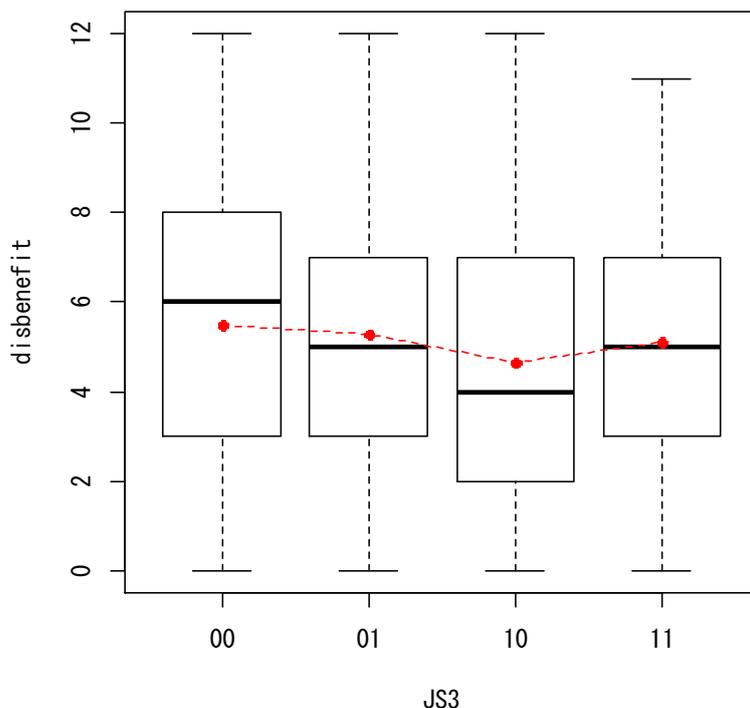
growing by JS3



次の boxplot 図は、不利益スコア (disbenefit score) (参考2) の分布を、現在の就業・就学状況別に示したものである。そこには、スコアの平均値の多重比較の検定結果も示してある。なお、この disbenefit 変数は、問 29、問 30a、問 30b、問 30c、問 30d、問 31 の 6 質問に対する回答データから合成された変数で、回答者の「不登校経験のマイナス影響 (の認識)」の程度を測るために作成したものである。

このグラフには、「00:非就業・非就学者」「01:就学者」「10:就業者」「11:就業・就学者」という現在の就業・就学状況別に、その不利益スコア (disbenefit score) の分布を示したもので、このスコアが大きいほど小中学生の頃に不登校だったために不利益や不当な扱いを受け、そのマイナス影響を感じる度合いが大きいということを示している。全体として、グループ間にそれほど大きな差は見られないが、「00:非就業・非就学者」「01:就学者」「11:就業・就学者」「10:就業者」の順に度合いが低くなっていることが示されている。すなわち、「10:就業者」「11:就業・就学者」は、「00:非就業・非就学者」「01:就学者」に比べて「不登校によるマイナス影響」を感じる度合いが小さいことを示している。

disbenefit by JS3



## 第16章 不登校によるマイナスの影響と他項目との関連

### 1 中学校卒業時と比べて現在の自分が成長したところ（問27）との関連

■【（問27）中学校卒業時と比べて成長したところ】と、【（問31）不登校によるマイナス影響】とのクロス集計（上段…観測数、下段…標準化残差）

問27	不登校によるマイナス影響（問31）			
	1. 感じている	2. 感じていない	3. どちらともいえない	P値
1. 身のまわりのことが自分でできること	143 -3.6	346 <u>5.0</u>	234 -2.0	<u>0.0</u>
2. 身体が健康になったこと	74 -3.0	195 <u>3.6</u>	132 -1.0	<u>0.001</u>
3. 生活のリズムがつかれること	117 -3.3	288 <u>4.3</u>	197 -1.5	<u>0.0</u>
4. 自分で働いて収入を得ようとする	144 -4.1	368 <u>6.3</u>	235 -2.8	<u>0.0</u>
5. 人とうまくつきあえること	110 -7.5	375 <u>8.0</u>	239 -1.5	<u>0.0</u>
6. 人の痛みがわかるようになったり、人に対して優しくなったこと	164 -2.3	343 <u>3.0</u>	258 -1.0	<u>0.008</u>
7. 自分に自信が持てること	64 -8.0	296 <u>8.3</u>	175 -1.3	<u>0.0</u>
8. 家族との関係が改善されたこと	71 -3.2	184 <u>2.6</u>	140 0.2	<u>0.003</u>
9. 将来の希望が持てること	78 -5.4	260 <u>5.8</u>	167 -1.1	<u>0.0</u>
10. かつとしたり、いらいらしたりしなくなったこと	65 -0.8	137 2.1	92 -1.5	0.1
11. いつまでもくよくよ悩まなくなったこと	55 -6.0	215 <u>5.1</u>	147 0.1	<u>0.0</u>
12. 自分の気持ちをはっきり表現できること	77 -5.1	249 <u>5.3</u>	163 -0.9	<u>0.0</u>
13. 孤独に耐えられること	84 -1.5	170 0.8	144 0.6	0.3
14. 学力が身に付いていること	71 -4.1	223 <u>5.6</u>	130 -2.2	<u>0.0</u>
15. その他	15 -2.3	45 0.6	42 1.4	0.07
16. 成長したとは思えない	53 <u>5.9</u>	21 -5.1	40 0.0	<u>0.0</u>

【（問 31）不登校によるマイナスの影響】の質問に「2. 感じていない」と回答した者は【（問 27）中学校卒業時と比べて成長したところ】との関連について、有意な差が生じている項目は高い比率から5項目あげると、「7. 自分に自信が持てること」「5. 人とうまくつきあえること」「4. 自分で働いて収入を得ようとする事」「9. 将来の希望が持てること」「14. 学力が身についていること」である。一方で、マイナスの影響を感じている回答者は、「16. 成長したとは思えない」という回答が有意に高い。

## 2 将来やってみたい仕事の有無との関連（問 32）

■【（問 31）不登校によるマイナスの影響】と【（問 32）将来やってみたい仕事】とのクロス集計（1 段目…観測数、2 段目…割合（%）、3 段目…標準化残差）

問 31	将来やってみたい仕事（問 32）			
	1 ある	2 ない	3 すでにやり たい仕事に就 いている	合計
1. 感じている	234	130	12	376
	62. 23	34. 57	3. 19	23. 96
	-2. 0	<u>4. 5</u>	-3. 8	
2. 感じていない	439	129	78	646
	67. 96	19. 97	12. 07	41. 17
	1. 0	-4. 4	<u>5. 3</u>	
3. どちらともいえない	370	145	32	547
	67. 64	26. 51	5. 85	34. 86
	0. 7	0. 5	-2. 1	
合計	1043	404	122	1,569

【（問 31）不登校によるマイナスの影響】の質問に「1. 感じている」と回答した者は、【（問 32）将来やってみたい仕事】は「2. ない」と回答した者の割合が有意に高い。また、【（問 31）不登校によるマイナスの影響】について「2. 感じていない」と回答した者は、【（問 32）将来やってみたい仕事】について「3. すでにやりたい仕事に就いている」と回答した者の割合が有意に高い。

### 3 自分の将来の夢や希望との関連（問 33）

■ 【（問 31）不登校によるマイナスの影響】と、【（問 33）将来の夢や希望】とのクロス集計  
（1 段目…観測数、2 段目…割合（%）、3 段目…標準化残差）

問 31	将来の夢や希望			
	1. ある	2. ぼんやりとある	3. ない	合計
1. 感じている	121	131	124	376
	32. 2%	34. 9%	33. 0%	23. 9%
	-5. 3	-0. 1	<u>6. 5</u>	
2. 感じていない	358	192	97	647
	55. 3%	29. 7%	15. 0%	41. 2%
	<u>7. 6</u>	-3. 7	-4. 9	
3. どちらともいえない	212	227	110	549
	38. 6%	41. 4%	20. 0%	34. 9%
	-3. 1	<u>3. 9</u>	-0. 7	
合計	691	550	331	1572

【（問 31）不登校によるマイナスの影響】の質問に対し、「1. 感じている」と回答した者は、【（問 33）将来の夢や希望】は「3. ない」と回答した者の割合が有意に高い。逆に【（問 31）不登校によるマイナスの影響】の質問に対し、「1. 感じていない」と回答した者は、【（問 33）将来の夢や希望】は「1. ある」と回答した者の割合が有意に高い。

不登校であったことがマイナスに影響していると感じているか感じていないかは、将来の夢や希望をもてるかもてていないかについても、強く関連していることがうかがえる。

## 第17章 将来の生活の見通しについて

### 1 将来つきたい仕事の有無（問32）

#### （1）現在の就業・就学状況との関連

現在の就業・就学状況と「将来つきたい仕事」との関連について分析する。

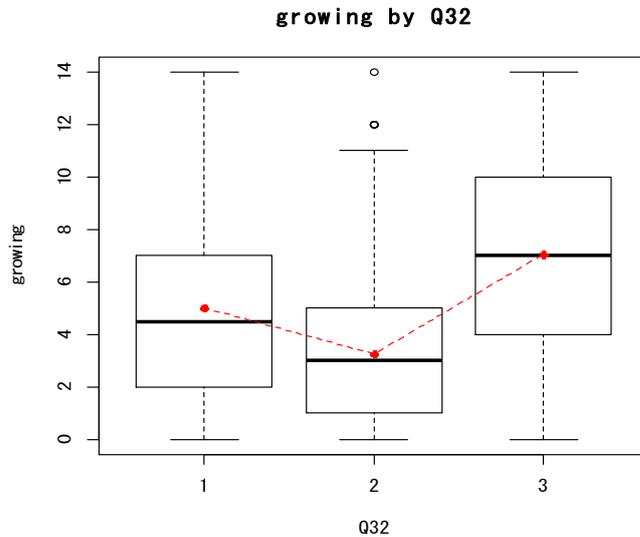
■現在の就業・就学状況と【（問32）将来つきたい仕事】とのクロス集計と割合及び標準化残差（上段…度数、中段…割合、下段…標準化残差）

24N、25N	将来つきたい仕事（問32）			
	1. ある	2. ない	3. すでにやりた い仕事について いる	合計
00:非就業・非就学者	162人	110人	0人	272人
	59.6%	40.4%	0.0%	18.0%
	-2.69	<u>6.10</u>	-5.25	
01:就学者	332人	86人	0人	418人
	79.4%	20.6%	0.0%	27.7%
	<u>6.57</u>	-2.87	-6.93	
10:就業者	283人	149人	93人	525人
	53.9%	28.4%	17.7%	34.7%
	-7.59	1.68	<u>10.70</u>	
11:就業・就学者	229人	45人	23人	297人
	77.1%	15.2%	7.7%	19.6%
	<u>4.31</u>	-4.68	0.05	
合計	1006人	390人	116人	1512人

このクロス集計表には、両者に明確な相関関係があることが示されている。「00:非就業・非就学者」は、【（問32）将来つきたい仕事】は「2. ない」の比率に有意な差が生じている。これに対して、「01:就学者」や「11:就業・就学者」は「1. ある」の比率に有意な差が生じている。

#### （2）成長スコア（growing score）との関連

先に作成した成長スコア（growing score）を使って、【（問32）将来つきたい仕事】との関連を分析する。

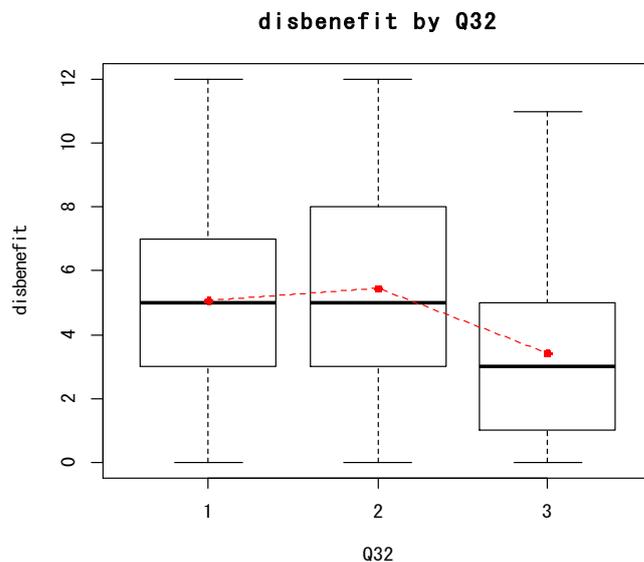


上の boxplot 図は、【（問 32）将来つきたい仕事】への回答グループ別に成長スコア（growing score）の分布を示したものである（図中の点がスコアの平均値を示している）。図から分かるように、三つの回答グループにおける成長スコア（growing score）の分布と平均値には有意な差が見られる。スコアの平均値でいえば、「将来つきたい仕事」が「2. ない」（3.3）、「1. ある」（5.0）、「3. すでにやりたい仕事に就いている」（7.0）の順に高くなっている。

### （3）不登校によるマイナスの影響（問 31）との関連

先に作成した不利益スコア（disbenefit score）と【（問 32）将来つきたい仕事】との関連について分析する。

以下の図は、「将来つきたい仕事」の有無について聞いた問 32 への回答別に不利益スコア（disbenefit score）の分布を見たものである。



「将来つきたい仕事」が「1. ある」という回答グループと「2. ない」という回答グループとの間で、その不利益スコア (disbenefit score) の平均値に有意な差はない（「1. ある」の平均値は 5.1 で「2. ない」の平均値は 5.5）。すなわち、「将来つきたい仕事」の有無と「不登校によるマイナスの影響」とは直接には関連していないと考えられる。

なお、「3. すでにやりたい仕事についている」という回答者の不利益スコア (disbenefit score) の平均値 (3.4) は、残りの 2 グループよりも有意に低くなっており、不利益を感じていない傾向がある。

## 2 自分の将来の夢や希望 (問 33)

### (1) 現在の就業・就学状況との関連について

■現在の就業・就学状況と【(問 33) 将来の夢や希望】のクロス集計と割合及び標準化残差

24N、25N	将来の夢や希望 (問 33)			
	1. ある	2. ぼんやりとある	3. ない	合計
00:非就業・非就学者	77 人	100 人	96 人	273 人
	28.2%	36.6%	35.2%	18.0%
	-5.84	0.71	<u>6.28</u>	
01:就学者	197 人	157 人	66 人	420 人
	46.9%	37.4%	15.7%	27.7%
	1.37	1.31	-3.19	
10:就業者	243 人	166 人	116 人	525 人
	46.3%	31.6%	22.1%	34.7%
	1.25	-1.88	0.68	
11:就業・就学者	151 人	104 人	42 人	297 人
	50.8%	35.0%	14.1%	19.6%
	<u>2.61</u>	0.09	-3.29	
合計	668	527	320	1515

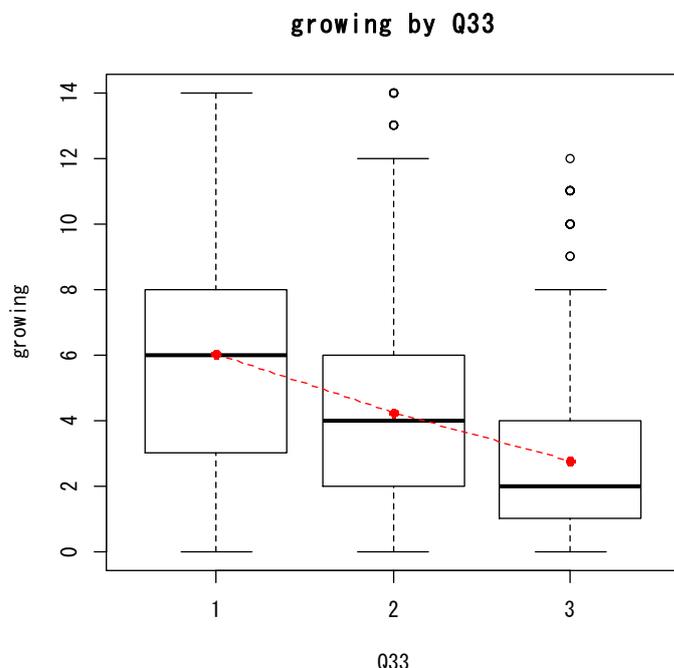
現在の就業・就学状況において「00:非就業・非就学者」は【(問 33) 将来の夢や希望】が「3. ない」という比率に有意な差が生じている。

これと対照的に、「11:就業・就学者」は、将来の夢や希望が「1. ある」と答えた比率に有意な差が生じている。「01:就学者」と「10:就業者」は、これらの中に位置していると言えるが、「10:就業者」と「01:就学者」における将来の夢や希望が「3. ない」を比べると、「10:就業者」の方が「3. ない」に有意な差が生じている。

このことから、「11:就業・就学者」「01:就学者」「10:就業者」「11:就業・就学者」の順に、将来の夢や希望を抱いていると考えられる。

## (2) 中学校卒業以後成長した点との関連

先に作成した成長スコア (growing score) を使って、【(問 33) 将来の夢や希望】について分析する。



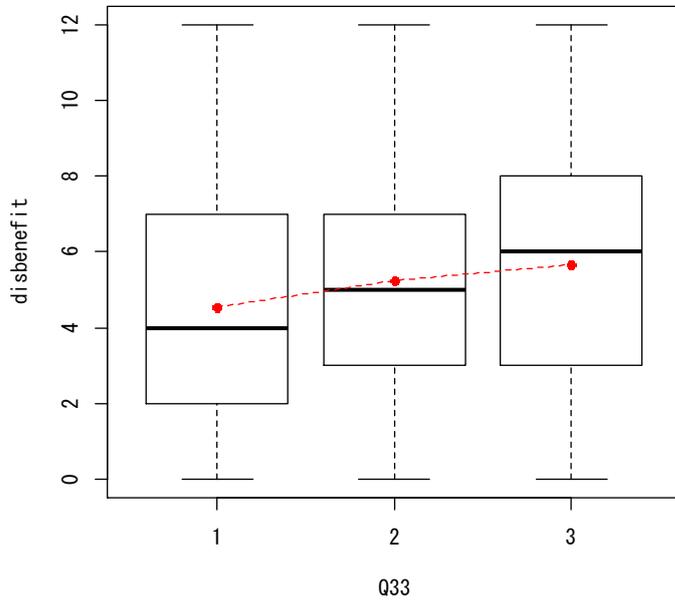
【(問 33) 将来の夢や希望】と「成長した点」の認識の間には相関関係があることを示している。すなわち、成長スコア (growing score) の平均値が高い順に、将来の夢や希望が「1. ある」「2. ぼんやりとある」「3. ない」となっている。このことから、成長の認識の度合いと将来の夢や希望をもっている度合いとが正の相関関係にあることが分かる。

## (3) 不登校経験によるマイナスの影響 (問 31) との関連

以下の図は、【(問 33) 将来の夢や希望】の有無について回答別に不利益スコア (disbenefit score) の分布を見たものである。

図からは【(問 33) 将来の夢や希望】が「1. ある」(4.5)、「2. ぼんやりとある」(5.2)、「3. ない」(5.7)の順番で不利益スコア (disbenefit score) の平均値は高くなっている。すなわち、不登校によるマイナスの影響の度合いが低いほど、自分の将来についての夢や希望を抱いていることが分かる。しかし、問 33 に対する回答グループ間の平均値の差は小さいことから、この関連は強いものではないと考えられる。

disbenefit by Q33



## 第Ⅳ部 ケース分析

### 第18章 聞き取り調査についての分析

C調査は、調査対象者 536 人に、面接担当者が直接電話をし、本人から聞き取る形で行われた。調査に携わった面接担当者は 16 人、調査に協力してくれた対象者は 379 人、電話での面接時間は一人おおむね 1 時間を越える程度であった。その後、面接担当者が記録した内容をもとに分析を行った。

以下の分析では、主に「不登校をしていたことを、どう考えているか？」についての聞き取り内容を分類した後に、一部、B調査との関連についても分析を行った。

#### 結果と考察

聞き取りによる調査結果のうち、本章では、5 年経過した現在、不登校経験への自己評価について特に多く語られた「不登校であったことを、どのように思っているか」についての部分を中心に、分類及び考察を進める。

聞き取り内容を概観した結果、不登校についての語りを、肯定的回答と否定的回答、中立的回答（両面ある、仕方がない、考えないようにしている）の五つの大カテゴリーに分類した。それぞれの人数を Table1 に示す。否定的な回答（否定群）が 39.4%と最も多く、次いで 32.6%を占めたのが肯定的回答（肯定群）であった。また、肯定・否定と判別が難しい中立的な回答の中では、「仕方がない」が 14.3%と多く、次いで「両面ある」が 8.9%、「考えないようにしている」が 4.9%となった。なお、分類不可となったのは、無回答のもの、及び「分からない」「ない」というように、語りそのものを拒否したような結果に終わったものであり、以下の分類・考察については、これら 6 件は省いて行う。

Table1 大分類と人数分布

大カテゴリー	人	%
肯定（行かないことに意味があった）	114	32.6
否定（後悔している、行けばよかった）	138	39.4
中立：両面ある	31	8.9
：仕方がない	50	14.3
：考えないようにしている	17	4.9
分類不可 6		

次に、不登校により得たこと（成長したこと）、不登校により失ったこと（もの）に注目し、前者については八つのキーワード（成長カテゴリー：Table2）、後者については四つのキーワード（理由カテゴリー：Table3）が見いだされた。大カテゴリーごとの、成長カテゴリーの出現率を見ると（Table2）、その大部分が肯定群に分布していた。また、理由カテゴリーについては、ほとんどが否定群に含まれていることが確認された（Table3）。そこで、以下では、否定群について、その「理由（理由カテゴリー）」をもとに分類し、代表的な語りを抽出した上で、不登校に対するネガティブな語りの内容について考察する。また、中立群については、比較的少数であったため、大カテゴリーごとに、それぞれの特徴を表すケースを抽出し、考察を加える。最後に、肯定群については、成長カテゴリーごとに代表する語りを取り出し、不登校を受容・肯定できている根拠や背景について考察する。

Table2 大カテゴリーごとの成長カテゴリーの出現率 ※（ ）内は%

成長カテゴリー↓	肯定	両面	考えない	仕方ない	否定	小計
休んだおかげで今の自分がある	14(12.3)	3(9.7)	1(15.9)	2(4.0)	0	20
成長した、視野が広がった	7(6.1)	5(16.1)	0	2(4.0)	0	14
出会いがあった、学校に巡りあった	11(9.6)	5(16.1)	0	1(2.0)	0	17
人とは違う経験をした	10(8.8)	2(6.5)	0	0	0	12
人に優しくなった	4(3.5)	1(3.2)	0	0	0	5
自分で選択したことである	3(2.6)	3(9.7)	1(9.7)	1(2.0)	0	8
無理していくよりはよかった	11(9.6)	2(6.5)	2(11.8)	1(2.0)	0	16
学校に意味が見いだせない	10(8.8)	0	0	4(8.0)	0	14
大カテゴリーの総数	114	31	17	50	138	

Table3 大カテゴリーごとの理由カテゴリーの出現率 ※（ ）内は%

理由カテゴリー	肯定	両面	考えない	仕方ない	否定	小計
学力・勉強	5(4.4)	5(16.1)	0	0	41(29.7)	51
友人関係	0	1(3.2)	0	0	23(16.7)	24
進路	2(1.8)	6(19.4)	0	3(0.9)	27(7.7)	38
思い出	1(0.9)	2(6.5)	0	0	19(13.8)	22
大カテゴリーの総数	114	31	17	50	138	

## 1 否定的な語りについての分類と分析

否定的な回答については、その理由として挙げられていたキーワードにより4観点<勉強・学力><友人関係><進路><思い出>を見だし分類した。

Table4 不登校を否定する理由

理由	人数	350人中%
学力・勉強	51	14.6
友人関係	24	6.9
進路	38	10.9
思い出	22	6.3

それぞれの特徴が顕著なものを抽出し、以下、考察を加えた。

### 1-1. 学力、勉強

51人中14人分

- 1-1-1. 行っておけばよかったと思う。知り得ない知識、情報を得ただろう。でも仕方なかった、後悔はしている。普通の子と同じように親に甘えていられるうちは甘えておけばよかった。高校時代は楽しかったと思えるように。
- 1-1-2. 行けばよかったと思っている。漢字など中学の勉強ができてないし、運動会とか全く出ていない。
- 1-1-3. 後悔している。学力がついていないから、高校にも行けず、将来動物関連の仕事に就きたかったのに、そのための専門学校に進めなくなってしまった。

- 1-1-4. 今は、学校へ行けばよかったと思う。勉強ができなかったこと、そして高校へ行けなかったことからそう思う。しかし、当時はそんなふうに思える気持ちの余裕はなかったことは確かである。人から、いろいろ言われても、「行こう」という気持ちにはなれなかった。自分の中に「行こう」という気持ちがないと、行けないと思う。中3の時に、自分から「行こう」と思えて行くようになった。それは、(支援センターでの)後輩から頼られたから、「頑張ろう」という気持ちになったのだと思う。
- 1-1-5. 行けばよかった。でもそれを言っても仕方がない。学校へ行っていなければ、勉強、人の付き合いがもてない。多少無理してでも行けばよかった。でもTV見ていると、私の時よりもずーっと変わった感じ。高校に入って社会を見ると、考えも変わった。
- 1-1-6. 学校へ行っていた方がよかったと今でも後悔している。対人関係の経験が乏しく、未熟な自分は、学力面でも遅れ、一般知識に乏しい点が悔やまれる。
- 1-1-7. ちゃんと行っておけばよかった。嫌なことがあっても場になれ、勉強しておきたかったな。義務教育だけでも。
- 1-1-8. もっと先のことを考えればよかった。後悔している。学力面でのこと。
- 1-1-9. ちゃんと勉強しておけばよかった。後悔ある。あの時の自分はアホだなと思った。授業は嫌いで遊ぶ方が楽しいと。
- 1-1-10. 後悔している。もうちょっと勉強しておけばよかったと思う。特に国語と数学はもう少し勉強しておきたかったと思っている。
- 1-1-11. 勉強面で、後悔している。大学に入って、英語や数学が困っている。
- 1-1-12. 行けばよかったと思っています。勉強が遅れてしまったので。専門学校のとき友達との学力差がとても気になりました。
- 1-1-13. 今では「後悔している」です。勉強できないまま高校に行ってしまったからです。
- 1-1-14. 後悔しています。学校でしか教えてもらえないものもありますから。

聞き取り調査対象者の中で、学習面の遅れや勉強ができないことを否定的に語るものは多い。一般知識の欠如として実感することもあれば(1-1-1、1-1-6、1-1-14など)、進みたい学校に進学できないという現実的な不利益として実感されることもある(1-1-3など)。また、中学時代の不登校による勉強不足が、その後、高校(1-1-13)や専門学校(1-1-12)、大学(1-1-11)での学力差や勉強についていけない感覚を生じさせることもあり、長期的な後悔につながってしまう場合もある。不登校児童生徒を巡る学力・進学問題は、今後も大きな課題になると考えられる。

## 1-2. 友人関係

24人中7人分

- 1-2-1. 勉強が遅れただけではなく、友達関係もなくなってしまった。できれば学校に行きたかった。
- 1-2-2. 行ければ行った方がよかったと思う。学校で友達と会うしかないの、学校に行っていれば仲のよい友達と学校以外でも会うことができたと思うから
- 1-2-3. 少しだけ後悔している。不登校をしていたことで、友達と過ごす時間が少なくなった。もっと友達と過ごしたかった。
- 1-2-4. 行っていた方がよかったとも思う。同級生と同じ年の方がよかったかな。(これは現在大学1年で、同級生は2年年下なので、ということ)2年間でできることがあったかもしれないので。
- 1-2-5. 行けばよかったと思っている。周りの子たちが、学生時代の友達と話をしているのを見たり、一緒に遊びに出かけたりしているのを見ると、うらやましいと思う時がある。
- 1-2-6. 義務教育の中学までの間に、人との関わり方というものをもっと勉強しておけばよかった。

人とちゃんと向き合って、話しておけばよかった。自分の甘えとか、面倒くさいとかもあった。

1-2-7. 正直言うと、学校は楽しいところやったな、と仕事をしだしてから思う。勉強うんぬんよりももっと友達をつくれたかな、と思う。

不登校で失ったものの一つとして友人関係を挙げる語りも少なくない。学校に行かないことで失った「当時の友人関係」もあるだろうし（1-2-3 など）、それが「今の友達」の少なさにもつながっていることによる思いもあるだろう（1-2-5 など）。また、不登校により「同学年の友達を失った（1-2-4）」という語りもある。学校で友達と過ごした思い出は、後から思うと「楽しい」ものになるのであり、「中学時代に（子供時代に）もっと楽しんでおけば（よかった）」（1-2-7）という語りになるものと考えられる。

### 1-3. 進路

38人中11人分

1-3-1. 後悔している。学力がついていないから、高校にも行けず、将来動物関連の仕事に就きたかったのに、そのための専門学校に進めなくなってしまった。

1-3-2. 行っておけばよかったと思う。行っていれば楽しかっただろうな。小、中の思い出がない。でも、行っていないことがいい経験になるのじゃないかなとも思う。他の人が感じないことを感じたし。でも、やっぱり行っていた方が楽しかったのかもしれない。高校ももっといいところへ行けたらだろうし、そうすれば就職も変わっていたかもしれない。でも、この先も何とかなるだろうと思っている。

1-3-3. 何事も実際学校へは最低限行っておくべきだった。と、ひしひしと感じる。自分の行きたい学校に行けなかった。行ければよかった。

1-3-4. 「行っていたらよかった」と思うこともあります。「行っていたら」今よりももっといい仕事に就けたかもしれないと思うからです。今の自分の力ではこんな仕事しか就けないのだ、そんなことは分かっていたことだし、仕方がないことなのだと思います。

1-3-5. 行けばよかったかなと思う。つらいはつらいが、未来のことを考えるとそう思う。

1-3-6. 後悔している。行っていたら今は違っていただろう、と思う。

1-3-7. 不登校していたことを後悔している。逃げ出さずに学校に行けばよかった。普通の高校に行っていたら、学生生活をきちんとしていたら、別な人生を進めた。行った高校は、不良も多く、授業中にトランプをしたりして好きなように過ごし、勉強が成り立たない状態だった。

1-3-8. 職場を見つけないといけないと思う。仕事をやると、長い時間立っていることも、座っていることもできない。具合が悪くなってしまふ。後悔している。自分の夢がかなえられないから。

1-3-9. 今となれば「学校へ行けばよかった」という気持ちはあります。仕事を探すにしても中卒だと…。

1-3-10. 後悔しています。ちゃんと学校に行って卒業していれば、もっとちゃんとした仕事に就けて（正社員になれたり、資格を持って仕事をしたりすること）、ちゃんとした生活ができるからです。

1-3-11. やっぱり後悔はありますね。高校へ行かなかったが、行っておけばよかったと思うことがある。自分の好きなことで資格を取ろうと思うと高卒資格が必要で、取りたい資格が取れない。自分は整備士になりたくて、資格を取ろうとしたらだめだった。友人の家が中古車販売をやっていて、来年からそこに勤めるつもり。将来は、重機や特殊車両の販売をやり

たい。店をだしたいという夢がある。だから、高校（定時制）に行こうかと思っている。行った方がいいなと思っている。

ここに挙げた語りは、不登校をしたことで学力が低くなったり、高卒の資格が取れなかったり、その後の進路にマイナスの影響を受けたということを語っているものである。その多くが中学卒業後の高校だけでなく、専門学校（1-3-1）や就職（1-3-2、1-3-9、1-3-12 など）にもダメージがあったという解釈をしている。あるいは、高校にも行ったし仕事にも就いているが、不登校をしなければ「もっといい高校(1-3-2)」「普通の高校(1-3-7)」「もっとちゃんとした仕事(1-3-10)」が手に入ったかもしれないという、過去を悔いる気持ちを抱くものもいる。その背景にあるのは、自分の現状に対する不本意感や、「今の自分の力ではこんな仕事しかつけないのだ」（1-3-4）という自己否定的な思いであろう。

#### 1-4. 思い出

22人中9人分

- 1-4-1. 行った方がよかったかなと思っている。行事もあったので、参加すれば楽しかったらうなと思う。中学の修学旅行は友人が何人かいるグループで行ったが、楽しかった。
- 1-4-2. 正直行けばよかった。その時期にしかできなかったことをしておけばよかった。
- 1-4-3. 少し後悔している。中学のアルバムを見ても自分が写ってないので、行事などに参加しなかったことは残念に思う。
- 1-4-4. 大学になると周囲の子が、中学の時の話をすることがある。そういう時に、自分には中学の時の思い出（体育祭や文化祭など）が全くといっていいほどないので、話に入れなくなる。そういう時に「行っていればよかったな」と思うこともある。丸々3年間を棒に振っているので、行事系の思い出やクラスのみんなでした経験がない。テレビでそういう特集を見ている時も、自分も行っていれば楽しかったかなと思うことがある。
- 1-4-5. 「後悔している」ですね。やはり学校行事に参加できなかったことです。
- 1-4-6. もったいないことをした。行っておいたら楽しかったのかなとか。卒業してから成人式があったので、誘われて同窓会に行ったが、みんな話しかけてくれて楽しかった。行っておけばよかったかなと思います。
- 1-4-7. あまり考えてはいなかったが、成人式で中学時代の映像、写真が流されたのを見て「ああ、行けばよかったな」と初めて思った。当時は無理だったが、今思えば、行けばよかったと思っている。
- 1-4-8. 後悔はないけど、もうちょっと、学生時代、今になって学校をもうちょっと楽しみたかった。制服を着ておけばよかったかな、と思う。
- 1-4-9. いろいろな経験をできる貴重な時間を無駄にしてしまったと思う。行っていれば、いろいろな人と話ができただろう。行っていないので想像がつかないが、想像つかないいろいろなことがあったらうなと思う。時間は戻ってこないのも、もったいなかった。思い出がない。高校の時、全員参加のダンスコンテストがあり、みんなで練習した時の夕方の階段の景色とか何でもない小さなことをくっきりと覚えている。そういう自分の中を占めている要素は、やはり学校に関していることが多い。子供時代をもっと楽しんでおけば、自分の中にいろいろな要素を入れておいてあげられたのと思う。

このカテゴリーは、友人関係の喪失とも大きく関連しているが、学校に行かなかったことによる「楽しかった思い出」がなく残念だという気持ち（1-4-5、1-4-6）であり、その後、友達が増えても、その友達と「中学時代の思い出」を語り合うこともできないというさびしさ（1-4-4）であろう。また、ちょうど20歳という時期でもあり、成人式に参加した時に、周りの参加者と共有

できる思い出がないというさびしさについての語りも見られた(1-4-7)。20歳になった今、中学時代に戻れないということを考えると、思い出がないということも大きな喪失として体験されていることが分かる。

## 2 中立的な語りについての分類と考察

次に、肯定とも否定とも判断がつきにくい語りを、中立的な語りとして<肯定・否定両面ある><考えないようにしている><仕方がない>と三つに分けた。それぞれについて考察する。

### 2-1. 両面ある

31人中12人分

- 2-1-1. 不登校がなかったら第一志望校に行けていたのかなと思うこともある。けれども、私立の友達にはできた。よかったとは言いきれないかもしれないけれども、嫌というよりはよかったのかなと思う。全部がマイナスではない。
- 2-1-2. 難しいです。後悔しているのだけれど、そのまま行っていたら経験できなかったことを経験できてむしろよかったですし…。もし行っていたらまた別の道があったかもしれないし…。
- 2-1-3. 今はちょっと気が弱くなっているので行っていればよかったと思っているが、ちょっと前までは行かなくて、いろいろできたからよかったと思っていた。今は大学行こうと思うと、行っていた方がよかったかなあと。今はこれから大学行こうという相談ができればいい。
- 2-1-4. 他の人ができない経験ができた。他の人ができない経験ができたのは、よかったと思っているが自分の進路が狭まってしまった。
- 2-1-5. 行っていたら身についていたこともあるのだろうと思う。行かなかったから身についたことも多い。自分の性格とか自分の進路とか。協調性とかは身につかなかったこと。
- 2-1-6. 行けばよかったと思っている。でも行ける学校(行きたいと思える学校)でなくては意味がないと思います。勉強面では行けばよかった。でも気持ち面では行かなくてよかった。無理して行っていたらもっと壊れていた。
- 2-1-7. 行っとけばよかったという気持ちはある、(学校に行っていたら)普通の生活ができたかと思う。でも、学校行かなかったからこそ見えたもの、今がある。今が充実している。迷惑かけた人には申し訳なかったと思うけど、これはこれでよかったと思うし、これから先どうなるかわからないから、終わりよければ全てよしで。
- 2-1-8. 嫌だったと言えば嫌だった、結果的にはいい高校に巡り会えた、いまだに、中学のいじめを引きずっていることもある、たまに夜中に思い出してつらいこともあるけど、そんなに悪く捉えてない、今となってはいい経験かな
- 2-1-9. 多少は行っておけばよかったという思いはあるけど、自分は家のことをみてきたことについて、間違いはないと思っているので、複雑な感じですね。
- 2-1-10. 後悔している。今だからこそ「行けばよかった」と思うが、「行っていたら」と想像すると足元がすくむ感じになる。
- 2-1-11. 行ければ行けたでよかったのかもしれないが、行けなかったのは、それはそれでよかったと思っている。
- 2-1-12. 「行けばよかった」と思う。後悔は多々ある。しかし、これは別にいいかな、過去に戻るのには嫌という思いもある。

調査対象者とのやりとりの中では、大多数のものが、不登校をしていたことについて多面的な語りをしており、そういう意味では、ほとんどの語りが「両面ある」に分類されるが、それらの中でも、その揺らぎが大きいものを集めた。この「両面ある」というグループは、不登校によるプラス面（得たもの：経験や巡り会いなど）とマイナス面（失ったもの：勉強や進路など）が両方あって、どちらか一方に決め難いという場合と、2-1-3のように、時期によって（自分の状態によって）その判断は揺れ動くのでどちらか一方には定められないという場合がある。

## 2-2. 考えない、考えたくない、どうでもいい

17人中5人分

- 2-2-1. 親の気持ちを考えると申し訳なかったと思う。親の気持ちを考えると世間体との戦いとかあったと思うので申し訳ない思いがある。自分の気持ちだけで考えるなら、いい2年間だったと思う。この期間を否定してしまうと自分の自我が壊れそうで怖いので、あまり否定的に考えないようにしている。思い出補正のようなものかもしれない。
- 2-2-2. 当時は、もう少し頑張っていけばよかったなと思っていた。例えば、卒業式は一生に1回だったなと思って。でも、6、7年たってみると、あの時間は自分の体調を戻すための準備期間だったのかな、あの時無理をしていたら、どうなっていたかわからないと思う。何か意味のある時間だったのではないかと思うことが多い。あまり悪いように考えないし、考えないようにしている。
- 2-2-3. 正直難しい。全く後悔していないかというウソになる。後悔したところで取り返しがつかない。後悔しないようにしている。
- 2-2-4. 不登校のことは、特別なことではないと思っている。
- 2-2-5. 当時は不登校とっていなかった、行かないのが当たり前、今思うと行っていた方がよかったかと。後悔はしてない。

ここに分類されたものの中には、考えると落ち込むので、あえて考えないようにしているという語り（2-2-2、2-2-3）、不登校であったことを否定すると、自分の自我が壊れそうで怖いので、あまり否定的に考えないようにしている（2-2-1）というように、考えないことで自分を防衛していることがうかがえるものがある。その一方で、（休むことは）当たり前のことなので考える必要がないというように、考えることそのものに意味がないと考えているものもあり、「考えない」という語りの背景にある不登校への思いは多様であることが分かる。

## 2-3. 仕方がない

50人中12人分

- 2-3-1. 行ければよかったのにはと思いますが、小学5年生の時は仕方なかったと思っています。いじめてくる上級生が怖かったということを、誰かに話せればよかったのにと今は思いますが、当時は家族の誰にも話せなかったので、閉じこもるしかなかったことは少し残念です。
- 2-3-2. あの時は学校へ行くと苦しくなっていたので行けなかった。行けないのは仕方がないことだと思っていたので後悔していない。周りの人も理解してくれたので嫌な思い出はない。
- 2-3-3. あの当時はああするしかなかった、仕方がなかったと思っている。行きたい気持ちはあっても、体が動かなかったので仕方がなかった。
- 2-3-4. 勉強のことに関しては、遅れてしまったので行くことができればと思うが、その時は怖くて学校に行くことができなかつた。その時は怖くて、学校に行くことができなかつたので

仕方がなかったと思っている。

- 2-3-4. 人混みが苦手で、緊張すると過呼吸になり、行きたいけど行けなかった。仕方なかった。
- 2-3-5. あれはあれでよかった。後悔はしていない。当時は不眠症にもなっていたし、「行け！」と言われても、朝、起きることができなかった。
- 2-3-6. 学校へ行かなかったことについては、前まで悔やんでいたこともあるが、今はいろいろ学ぶこともあったと思っている。仕方なかったし、今は後悔していない。
- 2-3-7. あの時はあれでよかったと思う。その時に自分で考えて決めたことであるし、今更後悔しても仕方ないと感じているため。
- 2-3-8. 後悔していません。でも修学旅行やイベントには行きたかったかな。でも病気だったので仕方なかったです。中学校へ通うよりはフリースクールのやり方でよかったです。
- 2-3-9. 「仕方なかった」で片付けたくはないけど、仕方なかったですかね。ただの「仕方なかった」だと自分が経験してきたことがうやむやにされて全否定されるようで嫌なのですけど。
- 2-3-10. 今思えば「行けばよかった」と思いますが、現実には「仕方なかった」ですね。今の私なら行けるのですが、当時は中学生でしたから。中学生って難しい年代ですね。
- 2-3-11. 凝り固まった考えをしないで「学校へ行けばよかった」とも思うけれど、生活の全てがバカらしくなっていたので「仕方なかった」です。
- 2-3-12. あれでよかったのではないかと思う。あれはあれで仕方なかった。高校時代がまた楽しかっただけに、3年間の時間をもったいなかったという気持ちはある。

「仕方がない」という思いの背景には、登校することに大きなストレスがあり、その結果、登校しようとする「体がいうことをきかなかった」「いじめがあったのでいけなかった」というように、＜努力しても駄目だった＝行くことができなかった＞という現実がある。そういう意味では、不登校をある種の喪失と考えつつも、消極的に受容している・受容しようとしている語りである。その反面で、「仕方なかった」で片付けることは「自分が経験してきたことがうやむやにされて全否定されるようで嫌」（2-3-9）という思いを抱えるケースもあり、その思いは複雑であることが分かる。

### 3 肯定的な語りについての分類と考察

最後に、肯定的な語りについては、その内容から、Table3と同様に8つのカテゴリーに下位分類した。

Table5 肯定的な語りについての小カテゴリー

	人数	%
休んだおかげで今の自分がある	20	18.9
成長した、視野が広がった	14	13.2
出会いがあった、学校に巡りあった	17	16.0
人とは違う経験をした	12	11.3
人に優しくなった	5	4.7
自分で選択したことである	8	7.6
無理していくよりはよかった	16	15.1
学校に意味が見いだせない	14	13.2

それぞれのカテゴリーについて、語りの内容からそれぞれの不登校経験者が自らの過去をどのように捉えているのか考察しておく。

### 3-1. 休んだおかげで今の自分がある

20人中7人分

- 3-1-1. 当時はつらいこともあったが、不登校の経過の中で、母親に反抗し、甘え、家族に温かく見守られて、不登校を乗り越えることができて今の自分があると思う。勉強をもっとしておけばよかったと思う気持ちがある。自分の不登校を今はよい方に捉えている。不登校があったから今がある。つらいことがあったけど、それを乗り越えられたことが自信になっている。自分に子供ができた時に苦しかったけど乗り越えられたことを話せる。よい経験をさせてもらったと思っている。
- 3-1-2. 学力に関しては「行けばよかった」だし、いじめに対しては「仕方なかった」だし、不登校したから今がある点では「むしろよかった」です。でも、全体的には「後悔していない」です。欲張りですね。（笑い）
- 3-1-3. あの時があったから今の自分があるんだと思っています。
- 3-1-4. あの時につまずいていなかったら今の自分はいない。苦しかったが強がりだとしても今ではよかったと思っている。
- 3-1-5. 今は、その時期があっただけよかったと思う。その時期があったから今こうして夢もできたし。その学校行かなかった時期を行っとけばとは思っていない。
- 3-1-6. 行かなくてもよかったかなと思っている。だからこそ今の自分がある。中学からの友達とも仲良くしていられているから。
- 3-1-7. あのままだ行っていたら今の自分はなかった。むしろよかった。

「休んでいた時間・苦しんでいた時間があったから今の自分がある」と、今（現在）の自分を肯定することで、過去の自分（不登校をしていた自分）も受容できているパターンである。ただし、全面的に肯定できているというよりも、3-1-1のように、本音としては後悔することも多々あるが、それでも「乗り越えることができた」と実感することで、不登校であったことを自分なりに意味づけられているケースも少なくない。

### 3-2 成長した、視野が広がった

14人中6人分

- 3-2-1. 行ったら行っただけ違う人生になっていたと思うが 今は後悔していない。引きこもったからこそ学べたことがある
- 3-2-2. よくわからないけれど、一人で考え自分の判断ができるようになったような気がします。というのは、今大学で周囲の人たちから「お前は、変わっているな!」とよく言われることがあるのですが、そんな時周囲の人たちと自分の違いは、あの経験かなと思うからです。
- 3-2-3. 不登校になって本当によかった、考える時間が必要だった
- 3-2-4. 後悔は実はほとんどしていない。その時の自分に必要なことだったから、そうなったのだろうと思う。肯定的な休息だったのだと思う。学校へ行っていることのメリットが、行かないことで見えてきた。人が当たり前に行っていることのメリット、デメリットが見えてきた。休んでいることで俯瞰（ふかん）できたからよかったと思う。
- 3-2-5. 必要期間だった。考える時間。自分と向き合う時間がいっぱいあった。なかなかできない特殊な体験だったと思う。
- 3-2-6. 学校に行っていたら、また違っていたかもしれないと思うことはある。仕方がなかったと思っている。不登校をしていたことで自分の中に、同年代の子よりも大人の部分が多くなったと思う。

「休むことにより、自分のことや周りのことを見つめられ、自分自身が成長した」というように、自分自身を、そして自分の経験を評価している語りである。3-2-4 に見るように、学校に行かないことで「学校へ行っていることのメリット」が見え、休んでいる罪責感から、不登校をしている自分に目を背けるのではなく、休むことを「肯定的な休息」と捉え直す（俯瞰する）ことができている。次なる成長のためには、苦しいけれども、自分の殻をつくり自分と向き合うことが必要であったと判断できているケースもある。

### 3-3. 出会いがあった、学校に巡りあった

17人中7人分

- 3-3-1. 学校へ行っていれば、今違うことができたかもしれない。普通高校に進み勉強していたかな。でも不登校だからこそ、専門学校に行き、出会いがあった。後悔はない。
- 3-3-2. 中3時に、出なくてもそれはそれでよかったかな。その時に何もしないで引きこもっていたのではない。外に出てその時、友達、周りの大切さに気付いた。無駄な時間ではなかった。
- 3-3-3. 不登校だったのは仕方がなかったと思います。仕方がなかったと思いますが、終わってみれば本当に大切な人間関係が見えてくる部分もありました。例えば、自分に元気があって、人から人気があって、羽振りのよい状態の時はいろんな人が寄ってくる。しかし、不登校になってクラスメートから忘れ去られた感じになって、学力もよくない時に、見捨てないでいてくれる友人や先生がいかに大切かわかったと思います。
- 3-3-4. 悔やむかどうかに関しては、悔やんでいない。いろんな世界を見られたこと。その時にフリースクールに通っていた時にいい友人に出会った。場所を変えてみればいい出会いがあったのはプラスに響いた。転がす先がよかったのでプラスに働いた。
- 3-3-5. 一言で言うと、あの時期に戻りたくない。今考えると、親友、カウンセラーと出会った。今の自分が不登校を経験したから今がある。人と違う所を経験した。
- 3-3-6. よいことだと思う。すごい自分悩んだし家族が助けてくれたし、自分をそういうふうに関係が助けようとしてくれたし、そういう時に、人って支えられているのだなといったことが分かったし、しかもこれから生きていく。義務教育は行きたくなければ行かなくていいし、自分はそう思う。・
- 3-3-7. 不登校になったからこそフリースクールにも行ったので、一概によかったとは言えないが、そういう経験を積めたのはよかったと思っている。

不登校という経験そのものはつらかったし、失うものもあったが、その間に会った友達やカウンセラーなど、自分を支えてくれる存在を財産と感じ、その出会いに感謝の気持ちを感じているパターンである。中でも、3-3-3 の「不登校になってクラスメートから忘れ去られた感じになって、学力もよくない時に、見捨てないでいてくれる友人や先生がいかに大切かわかった」という語りで見られるように、不登校になって失ったものを実感しているからこそ、そんな時にも支え続けてくれた人の存在は大きな意味を持つと考えられる。

### 3-4. 人とは違う経験をした

12人中5人分

- 3-4-1. 全然後悔していない。普通ではできない体験をしたと思っている。
- 3-4-2. 普通の子と違う時間を過ごしたと思う。いろいろなこと考え、特別な体験をした時期。他の人が、留学した経験を持っているとか、その程度のちょっと変わった経験をしたと思っ

ている。後悔とかはない。「行っていれば・・・」と考えたこともない。行っていなかったことを、人にも話せる。

- 3-4-3. 行かなくてよかった、とは思わない。親やいろいろな人に迷惑をかけてしまったが、人生の体験としては貴重なものだったと思う。
- 3-4-4. これからは不安ではあるが、あまり後悔していない。楽観的かもしれないけれど、普通に学校に行っている人たちとは違う意味があるのではないかと思っている。
- 3-4-5. いい経験ができてよかった。他人が経験できないことを体験した。

不登校期間は、その経験がつかさつし、家族等にも迷惑をかけたけれど、（学校に行っているだけでは）得られない「人とは違った経験（普通に学校に行っているだけでは経験できないこと）」を積んだことで、人とは違う見方ができるようになったということをプラスに受け止められているケースである。

### 3-5. 人に優しくなった

5人中4人分

- 3-5-1. 結果は行かなくてよかったと思う。学力では足りなくて、定時制は教科書が違う。大学ではいっぱい出てくる。そういう面ではもっと勉強しておけばよかった。でも、人間として何が大事かわかった。そういう体験ができたことはよかった。結果的には、いじめられてよかったことになる。人の気持ちが分かる。誰かのためになる。いじめられる側が悪いと言う人もいるが、いじめられる側の気持ちが分かる。
- 3-5-2. 学校に行けなくて、勉強できなかった時のことは、今勉強できて幸せということにつながっていると思う。自分自身が傷ついたので、周りの人に、ちょっと声をかけることを覚えた。
- 3-5-3. 悪くはなかった。心理をやっているのは、そのおかげ。そういう子の気持ちが分かる。
- 3-5-4. 後悔はある。でもあの時期があって、今がある。同じ経験をしている人の気持ちを理解できる。人の弱い部分にデリケートに関わっていけるようになった。

自分が不登校で苦しんだからこそ、同じ経験をしている他者の気持ちが理解できる。そういう意味で、人に優しくなれたし、同じように不登校で苦しんでいる人の助けになりたいという語りにつながっていると考えられる。

### 3-6. 自分で選択したことである

8人中4人分

- 3-6-1. 学校に対しては行けるのであれば行った方がいいと思う。学校は行ければ行った方がよいと思うが、自分は「行かない」という選択をした。
- 3-6-2. 高校と今が充実しているので マイナスはない。中学行っていたら、まじめに勉強しなかったかもしれない。行かなかったから勉強ができたかと思う。後悔はない。
- 3-6-3. 行った方が、普通の人生を歩めていたと思いますが、今までの人生が精一杯の人生だと思います。
- 3-6-4. あの時はあれでよかったと思う。その時に自分で考えて決めたことであるし、今更後悔しても仕方ないと感じているため。

3-6-1 や 3-6-4 は、不登校であったことによる喪失や不利益はあるが、それでも「自分で選択した」「自分で考えて決めた」ことであるので、受け止められているし後悔はしたくないという気持ちが表されたケースである。3-6-2 や 3-6-3 のように、不登校をしていなかったら別の生き

方はあったかもしれないが、それでも今精一杯に生きているので「マイナスはない」と、過去を肯定できている語りも少なくない。

### 3-7. 無理して行くよりはよかった

16人中7人分

- 3-7-1. あの時行かなくて本当によかったと思う。からかいがあり、徐々に休み始め欠席日数が多くなっていた。クラス全員から仲間外れの状況で行っていたら自分で命を絶っていたかもしれない。自殺事件があると、母があなたは休んでよかった、と言う。
- 3-7-2. 行けばよかったと思っている。でも行ける学校（行きたいと思える学校）でなくては意味がないと思います。勉強面では行けばよかった。でも気持ち面では行かなくてよかった。無理して行っていたらもっと壊れていた。
- 3-7-3. 今思えば、あれでよかったな、と思う。後悔していない。無理して行っていたら、死んでいたかもしれない。
- 3-7-4. 行かなかったことで最悪のことは避けられたと思います。行ければよいとは思いますが、学校に行くことを強制されていたら、追いつめられて最悪の事態になっていたかもしれないし、登校を強制されなかったから今があると思います。
- 3-7-5. 後悔していない。後悔しても仕方がない、行っていたらもっとひどかったかもしれない。「いなかったかもしれない」
- 3-7-6. 無理してでも、行っていたら、自殺考えていたかな。追いつめられる直前だった。今は大丈夫。当時はつらかったし、嫌だった。今は大丈夫。当時はつらかったし、嫌だった。
- 3-7-7. 自分の中では、休んだことがよい判断だったと思っている。家にひきこもらずずっと学校へ行っていたら、もっと精神的に追いつめられていたと思うし、自分自身の存在を否定してしまっていたかもしれない。

不登校をした背景に「いじめ」等があり、そこからの逃避として不登校を選んだことがうかがえるカテゴリーである。もし、無理して登校していたら「精神的に追い詰められていた(3-7-7)」であろうし、「最悪の事態になっていたかも(3-7-4)」しれないというように、極限状況にあった自分を振り返る語りや、切実な気持ちを表している。不登校が、「命を絶つ(3-7-1)」「壊れる(3-7-2)」「死ぬ(3-7-3)」などの状況を避けるための選択であり、それゆえに、不登校であったことを肯定できている群である。

### 3-8. 学校に意味が見いだせない

14人中5人分

- 3-8-1. 難しいですね。行っていれば、今と違った形で未来があったかもしれないが、それが今よりよいかはわからない。結果的に（行かなくても）よかったと思っている。
- 3-8-2. 行っておけばよかったというふうにはあまり思わない。地元以外の友達はたくさんいたし、地元にも中学の時から今も付き合いのある友達が1人いるので十分かなと思っている。勉強面では個別の塾に行っていたが完全には補えていなかったと感じているので、その点に関して思うところはある。けど、行きたくないのに行かなくていいと思う。
- 3-8-3. 悪いことをしているとは捉えていない。だから後悔はないから。
- 3-8-4. 正直、行かなくてよかったと思っている。レベルの低いやつが同じクラスにいるのが我慢できなかったし、それに関しての教師の対応も許せないし、幻滅した。
- 3-8-5. 今も仕事についている。学校に行っていた方がよかったという後悔はそれほどない。

最後のカテゴリーは、不登校を積極的に肯定しているわけではないが、「(登校したとしても)今よりよいかはわからない(3-8-1)」し、現状として、「友達もいる(3-8-2)」し「仕事にもついている(3-8-5)」ので後悔はないし、(学校に)行かなくてもよかったという評価であろう。他方、学校の劣悪な環境ゆえに、「(登校することが)我慢できなかった」し「行かなくてよかった」(3-8-4)という認識につながっているケースもある。

#### 4 いじめに関する語り

いじめられた経験を語りを含んでいるものは、全体で24件あったが、その「いじめに対する評価(思い)」については分かれるところである。以下に、不登校について肯定・中立的に語るものと、否定的に語るものに二分し、考察を加える。

Table6 大カテゴリーごとの、いじめを含む語りの割合 ※ ( ) 内は%

	肯定	両面	考えない	仕方ない	否定
いじめを含む語りの件数	9(7.9)	1(3.2)	0	6(12.0)	8(5.8)

4-1. 肯定・中立な語り 16人中5人分

- 4-1-1. 当時はつらかったが、今は人生的にいい体験をしたと思う。当時はつらかったので仕方なかった。家にいても自殺したいと何度も思い苦しんだ。
- 4-1-2. あの時行かなくて本当によかったと思う。からかいがあり、徐々に休み始め欠席日数が多くなっていった。クラス全員から仲間外れの状況で行っていたら自分で命を絶っていたかもしれない。自殺事件があると、母があなたは休んでよかった、と言う。
- 4-1-3. 正直死にたい時もあったが、あれ(不登校)がなければ今がないと思うし、あれ以外に生きる道はなかった。
- 4-1-4. 自分の中では、休んだことがよい判断だった思っている。家にひきこもらずずっと学校へ行っていたら、もっと精神的に追いつめられていたと思うし、自分自身の存在を否定してしまっていたかもしれない。
- 4-1-5. 行かなくて正解だった。今、ニュースで報道されているいじめのニュースを見ると、自分もあのまま誰にも言わず、学校に行きつづけていたら、同じようになっていただろうと思う。

4-2. 否定 8人中4人分

- 4-2-1. もったいなかったのではないかな。中3の時には、運動嫌いだったのに学校行事にも出られていた。中1、中2の時には出られなかったが。それぐらいしか思い出がないし、いじめにあっても、もっとぶつかっていけばよかった。やってみて後悔した方がいいのではなかったかと思う。
- 4-2-2. 行けばよかったと思っている。後悔している。いじめがなかったらもうちょっと学校に行きたかったし、行けたと思う。
- 4-2-3. 学校へ行っておきたかったけど仕方なかった。その前にいじめを解決したかった。解決してほしかった。後悔している。
- 4-2-4. 身長の小さいことで嫌なことを言われたにしろ、うまく流して行けばよかったと思う。

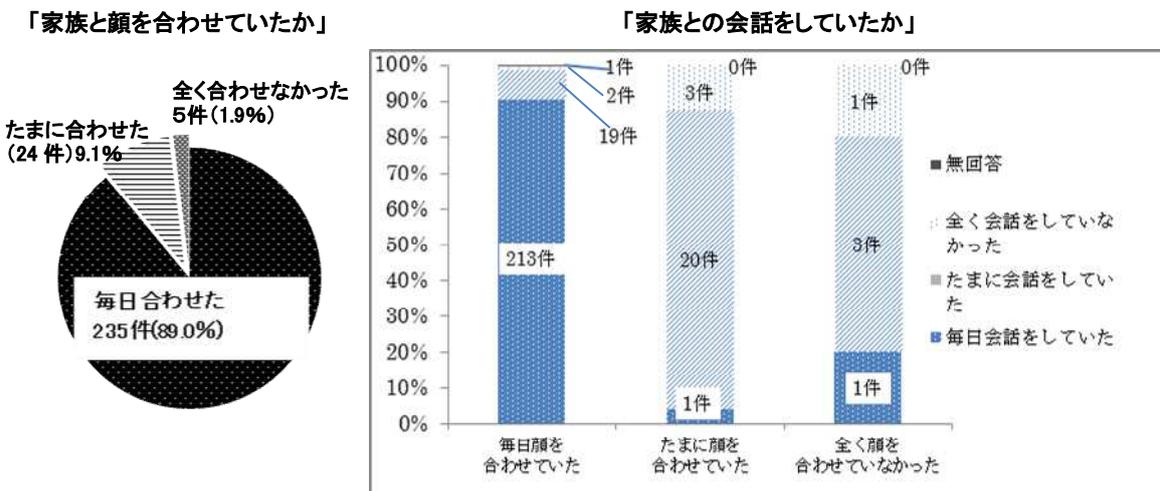
先生や友達に恵まれていたのにと、行けなかったことはちょっと後悔している。

中学時代に、同じようにいじめで苦しみ不登校になったとしても、5年後の判断は大きく分かれる。行っていたら「自分で命を絶ったかもしれない」(4-1-2)、「自分自身の存在を否定してしまっていたかもしれない」(4-1-4)と考え、不登校したことを「よい判断だった」(4-1-4)、「いい経験をした」(4-1-1)と受け止められるのは、現在の自分に対する肯定的な思い(満足感や自己肯定感)があるからだと思われる。他方、「もっとぶつかっていけば」(4-2-1)、「いじめがなかったら」(4-2-2)、「うまく流していければ」(4-2-4)という語りは、現在の自分に対し無念感や不本意感をもっており、その原因は不登校にあるのであり、そのきっかけとなったいじめにあると認識することが分かる。

## 5 家の間取りに関する語り

家の間取りに関する回答は、全体で374件あり、そのうち「一人部屋であった」と回答した者は264件、「一人部屋ではなかった」と回答したものは110件であった。

一人部屋であったと回答した者に「家族と顔を合わせていたか」「家族との会話をしてきたか」という質問をし、「毎日合わせていた」「たまに顔を合わせていた」「全く顔を合わせなかった」という回答ごとに、家族と「毎日会話をしてきた」「たまに会話をしてきた」「全く会話をしなかった」と回答した件数をグラフに示すと次のようになる。



一人部屋であっても、約80%の者が毎日顔を合わせ、会話をしていることが分かる。今回の調査において、全く顔を合わせず、全く会話をしなかったという回答は、374件中1件のみであった。このことから、一人部屋であることが家族と顔を合わせることが減ったり会話が少なくなったりすることに直接結びつくものではないことが分かる。

### 5-1. 家の間取り

264人中9人分

5-1-1. 不登校の間も、家族は仲が良かった。一緒に食事もしたし、家族で外出もしていた。

5-1-2. 離れに自分の部屋はあったが、家族のいるリビングで過ごすことが多かった。

5-1-3. いろいろ言われるので、気持ちとしてはなるべく顔を合わせたくないと思っていたが、夕

食の時には食卓で毎日顔を合わせていた。

- 5-1-4. 母や姉とはわりと話していたと思うが、父、祖母、兄とはあまり話さなかった。
- 5-1-5. 一人部屋だったが、閉じこもることは許されない環境だったため、毎日話さざるを得なかった。
- 5-1-6. 最初の頃は、自分の部屋にこもっていた時間が長かったが、教育支援センターに通いだしからは、不登校になる前よりも、話す時間が増えた。
- 5-1-7. 部屋ではなく、カーテンで仕切られた自分の居場所があった。それが引きこもらせなかったのよかったと思う。
- 5-1-8. 親と顔を合わせたくなくて、自分の部屋に閉じこもっていた。食事も自分の部屋でとって、会話はほとんどなかった。
- 5-1-9. 昼夜逆転していて、1週間、家族の誰とも顔を合わせない時もあった。

## 最後に

以上の分類・考察より、不登校経験者が様々な気持ちを抱えながら、その当時を振り返っていることが分かる。その語りの内容は、本来、単純に「肯定・否定・中立」などと分類できるものではありえない。しかし、本章では、語りの全体的なニュアンスから五つの大カテゴリーに分類し、不登校経験者が、「不登校により、何を得て、何を失った」と考えているかを分析した。平成5年度の調査からも伺えたように、中学卒業5年後の語りは、その人が今を生活している状況や満足感によって大きく左右されることが改めて確認された。20歳になった現在、希望通りの進路に進み、自分でも満足できる生活を送っている場合は、過去の不登校についても「自分にとっては意味があった」「あの時の時間があったから、今の自分がある」というように、肯定的に語る事が分かる。一方、今の生き方や生活が自分の望む内容ではない場合は、どうしてもその「根拠」を、過去の不登校に見だし、「不登校をしたから・・・」「不登校をしなかったら・・・」と後ろ向きな発言につながる事が見いだされた。しかし、その語りの多くは一色ではなく、いろいろな感情が交じり合っており、気持ちも揺らぎながら語っている様子が見ええる。以下にあげたように、B調査の結果の一部と、C調査の大カテゴリー分類をクロス集計した結果からも、そのずれが大きいことが確認された。B調査とC調査の時間的なズレから生じる変化とも考えられるが、語り手自身、そのときどきの様々な経験や出来事により、自らへの評価を変動させているのであろうし、それに伴い、不登校に対する語り（肯定・否定・中立）も変化していくであろうことは十分に考えられる。不登校経験者は、その後の人生の節々で、自分の不登校経験と向き合い、自分なりに折り合いをつけながら、あるいは、折り合いがつかずに悩んだり後悔を重ねたりしながら、不登校をした自分とともに生きていくという課題を抱えていることが再確認された。

Table7 B調査の回答とC調査の語り内容とのクロス集計

B調査→ C調査↓	行けば よかった	仕方が なかった	行かなくて よかった	なんとも 思わない	小計
肯定	25	30	32	21	108
両面ある	10	9	3	8	30
考えない	3	5	4	4	16
仕方がない	9	26	9	6	50
否定	78	38	7	12	135
	125	108	55	51	339

